

「新之助」生育速報 No.5

平成28年7月12日
村上農業普及指導センター

1 生育調査ほ・実証ほにおける生育状況（7月11日現在）

生育概況

草丈:やや長い 茎数:やや少ない 葉数:並 葉色:並

○生育は、全体的に順調に推移している。

○茎数と葉色は、地域差がある。

※管内のほ場で葉いもちの発生が確認された（7月11日）。

○新之助生育調査ほ・実証ほの調査結果（7月11日現在）

調査場所	田植日	草丈 (cm)	茎数 (本/m ²)	葉数 (葉)	葉色 (SPAD)
関川村下関（関川）	5月18日	54	592	11.6	38.9
村上市牛屋（神林）	5月16日	52	561	12.0	33.9
村上市十川（朝日）	5月16日	59	467	12.1	37.1
平均	5月17日	55	540	11.9	36.6
指標値（暫定）	5月15日	47	585	11.9	35.0
【参考：十川（H26、27平均値）】	5月13日	47	477	11.9	34.4

※ 調査場所は、普及センターで設置のほ場

2 今後の技術対策

当面の管理のポイント

◎水管理

- ・中干し終了後（出穂の1か月前には終わらせる）は、間断かん水とし、幼穂形成期以降は飽水管理とする。特に稲体は減数分裂期から出穂・開花期にかけて最も水を必要とするので水が不足しないようにする。
- ・異常高温、強風、フェーン時には速やかに湛水し、稲体の急激な蒸散防止に努める。
- ・異常低温が予想される場合には一時的に深水とし幼穂を保護する。
- ・輪番給水地域は、気象予報等に十分注意し、異常気象が予想される場合は給水可能な日にあらかじめ十分湛水するなど事前に対応できるように水管理に努める。

◎幼穂形成期の確認

- ・ 幼穂形成期（幼穂長が平均 1mm 以上となった時期）が 1 回目の穂肥時期にあたるため、幼穂長の確認を必ずおこない、穂肥施用が遅れないよう十分に注意する。
- ・ 過去データのある十川において、現在の生育状況から 1 回目の穂肥時期を予測すると、7 月 21 日頃と推定される。

◎穂肥施用

- ・ 穂肥については、出穂前 25 日～23 日（1 回目）と 14 日前（2 回目）の 2 回に分けて施用する。
- ・ 穂肥量は、1 回当たり 1kg/10a とし、合計 2 kg/10a 施用を基本とするが、地力や生育状況、気象予報から判断して、1 回当たり 1.5kg/10a を上限に施用量を調節し栄養凋落を防止する。
- ・ 出穂 10 日前以降の穂肥は、食味を低下させるので原則施用しないが、異常高温（猛暑）で栄養凋落が予想される場合には、追加の穂肥も検討する。
- ・ 有機質 100%肥料での穂肥施用はしない。

◎いもち病対策

- ・ 常にほ場をよく観察し、葉いもちの発病を認めた場合には、直ちに防除する。
- ・ 穂いもちのほ場抵抗性は「弱」でわたぼうし並に弱い。
- ・ 穂いもち防除は、葉いもちの発生がない場合でも、出穂前の適期に粒剤を施用するか、又は出穂期の状況に合わせ、粉・液剤で 2 回（出穂期直前と穂揃い期）の予防を実施する。
- ・ 共同防除は、新之助の防除適期とならない場合が多いので、その場合には、新之助に合わせた防除とする。

◎カメムシ対策

- ・ 県病害虫防除所から 6 月 29 日に「カメムシ類による斑点米の多発生」注意報が発表された。
- ・ カメムシ類の住み処をなくすため、農道・畦畔の定期的な草刈りと本田内のヒエやホタルイなどの雑草を残さない。
- ・ 防除については、アカスジカスミカメを主対象とした殺虫剤の散布を行う。